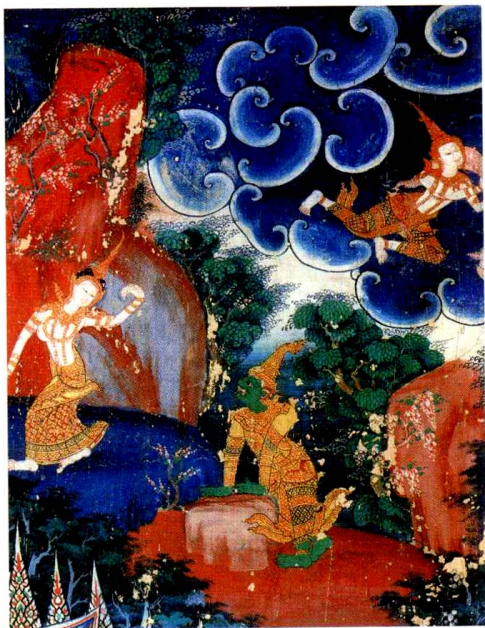


彦犬田四方

貴種と転生。



中上健次

貴種と転生・中上健次

二〇〇二年七月一〇日 第一刷発行

著者 四方田犬彦 (よもた いぬびこ)

発行者 菊池明郎

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三 ㊟二一―八七五五

振替〇〇一六〇―八―四二二三

装幀者 安野光雅

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社鈴木製本所

ちくま学芸文庫の定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。

筑摩書房サービスセンター

埼玉県さいたま市榑引町二一六〇四 ㊟三三二―八五〇七

電話番号 〇四八―六五一―〇〇五三

© INUHIKO YOMOTA, 2001 Printed in Japan

ISBN4-480-08639-0 C0195

貴種と転生・中上健次

四方田犬彦

目次

	文庫版への序	5
第一章	五衰の悦び	9
第二章	異界の変容	69
第三章	偽史と情熱	129
第四章	貴種の終焉	181
第五章	彷徨する兄弟	231
第六章	この路地の最後の者	279
第七章	重力の秋	319
補遺	奇番はじめの出来事	385

声と文様 396

中上健次の生涯 409

註 427

後記 I 431

II 433

解説 抵抗する小説、追跡する批評（ジャック・レヴィ） 437

著者の中上健次関係文献 443

索引 452

文庫版への序

本書は、一九八七年八月に新潮社より刊行された『貴種と転生』に、新たに第五章後半以下補遺までを加え、本文、註、索引の全体にわたって改訂を施し、題名をあらためた増補改訂版（新潮社、一九九六年）の文庫版である。先行する書物と増補改訂版の間には、二つの出来事、すなわち作家中上健次の夭折とその個人全集の完結が横たわっている。

著者識

貴種と転生・中上健次

『重力の都』の優れた英訳者にして
中上健次の水泳の好敵手であった
佐藤絃彰に

第一章 五衰の悦び

今昔、^{イマハムカシ} 釈迦^{シヤカ} 如来^{ニヨライ}、^{イマ} 未^{ホトケ} だ^{ナリクマハ} 仏^ニ 不^ナ 成^リ 給^マ ザリケル時ハ、^ボ 釈迦^{サツ} 菩薩^{ツツ} ト申^{マウシ} テ兜^ト 率^{ソツ} 天^{テン} ノ内^{ナイ} 院^{イエン} ト云^{イフ} 所^ソ ニゾ住^{スミ} 給^{タマヒ} ケル。而^{シカル} ニ閻^{エン} 浮^フ 提^{テイ} ニ下^ゲ 生^{シヤウ} シナムト思^{オボ} シケル時ニ、^ゴ 衰^{スイ} ヲ現^イ ハシ給^{タマフ} フ。其^{ソノ} 五^イ 衰^イ ト云^{イフ} ハ、一ニハ天人^{テンニン} ハ眼^メ 瞬^{マツロ} ク事^{ナキ} 无^{ナキ} ニ眼^メ 瞬^{マツロ} ロク。二ニハ天人^{テンニン} ノ頭^{カシラ} ノ上^{ウヘ} ノ花^{クエマシ} 鬢^{シボム} ハ萎^{ナキ} 事^{ナキ} 无^{ナキ} ニ萎^{シボミ} ヲ。三ニハ天人^{テンニン} ノ衣^イ ニハ塵^{チリ} 居^{ウケ} ル事^{ナキ} 无^{ナキ} ニ塵^{チリ} ・垢^{ウケ} ヲ受^{ウケ} ツ。四ニハ天人^{テンニン} ハ汗^{アヘ} アユル事^{ナキ} 无^{ナキ} ニ脇^{ナキ} ノ下^{ウラ} ヲ汗^{アヘ} 出^デ キヌ。五ニハ天人^{テンニン} ハ我^{オレ} ガ本^{モト} ノ座^ザ ヲ不^カ 替^カ ザルニ本^{モト} ノ座^ザ ヲ不^{モト} 求^{メズ} シテ当^{ナキ} ル所^{ナキ} ニ居^キ ヲ。

其^{コノ} 時^{トキ} ニ、^{モロモロ} 諸^{モロモロ} ノ天^{テン} 人^{ニン}、^{ゴノ} 菩^ボ 薩^{サツ} 此^{コノ} 相^{サウ} ラ現^{アラハ} シ給^{タマフ} ウ見^ミ テ、^{アヤシヒ} 恠^{アヤシヒ} テ菩^ボ 薩^{サツ} ニ申^{マウシ} シテ云^{イハ} ク、「我^{オレ} 等^ト、今日^{コノ} 此^{コノ} ノ相^{サウ} ラ現^{アラハ} シ給^{タマフ} ヲ見^ミ テ身^ミ 動^{ウツ} キ心^{ココロ} 迷^{マドフ} 願^{ネガハ} クハ我^{オレ} 等^ト ガ為^{タメ} ニ此^{コノ} ノ故^ユ ヲ宣^{イフ} ベ給^{タマフ} ヘ」ト。菩^ボ 薩^{サツ}、^{コト} 諸^{モロモロ} 天^{テン} ニ答^{コタヘ} テ宣^{イフ} ハク、「当^{マサ} ニ知^{シル} ベシ、^{モロモロ} 諸^{モロモロ} ノ行^{ギヤウ} ハ皆^ツ 不^ツ 常^{ネナラ} スト云^{イフ} 事^{ナラ} ヲ。我^{オレ} 今^{イマ}、^ヒ 不^シ 久^シ シテ此^{コノ} ノ天^{テン} ノ宮^{ミヤ} ヲ捨^ス テ閻^{エン} 浮^フ 提^{テイ} ニ生^{ウマレ} ナムズ」ト。此^{コノ} ヲ聞^キ テ諸^{モロモロ} ノ天^{テン} 人^{ニン} 歎^{オロ} ク事^{ナラ} 不^オ 愚^カ ズ。此^{コノ} テ菩^ボ 薩^{サツ} 「閻^{エン} 浮^フ 提^{テイ} ノ中^{ナカ} ニ生^{ウマレ} レムニ、^{クレ} 誰^{タレ} ヲカ父^{チチ} トシ誰^{タレ} ヲカ母^{ハハ} トセム」ト思^{オボ} シテ見^ミ 給^{タマフ} フニ、「迦^カ 毗^ピ 羅^ラ 衛^エ 国^{コク} ノ淨^{ジヤウ} 飯^{ポン} 王^{ワウ} ヲ父^{チチ} トシ摩^マ 耶^ヤ 夫^フ 人^{ニン} ヲ母^{ハハ} トセムニ足^タ レリ」ト思^{オボ} ヒ定^{サダ} 給^{タマフ} ツ。

『今昔物語・天竺二部』卷一の冒頭、「釈迦如来、人界ニシガイニヤドリクマヘルコト宿給語」なる説話の、前半に相当する部分である（註1）。

あるとき、兜率天にいた釈迦如来が人間の世界に生まれ出ようと思つたとき、その軀に五衰の徴候が生じた。天人であれば本来はしないはずの瞬まばたきが始まり、頭上にいただいている花鬘が萎んだ。衣服に塵や垢が付着し、脇の下に汗がにじむようになった。天人は自分の場所にじつと坐つたままでいるのが常であるのに、落着かず、ふらふらと場所を移るようになった。周囲の天人や菩薩たちはこの様子を見てひどく悲嘆し、原因を尋ねた。釈迦は万物の流転を説き、自分がまもなく天宮を捨て人界に降下することを予告した。

続く後半部では、迦毗羅衛國浄飯王の妃摩耶夫人が夢に白象の到来を見、託胎を授かつたという、有名な物語が語られている。第二話は次のようである。夫人が八万四千人の侍女を連れて无憂樹ムウウツの下を訪れ、孔雀の頸のように青緑に美しく輝く枝を折ろうとした瞬間、右の脇下から全身黄金色をした太子が生まれ、非常な光明を発した。無数の天人、天魔、梵天、沙門、婆羅門がことごとく集い見守るなかで、太子が四方に足を運ぶと、その足跡のひとつひとつに蓮の花が生じたこと。天界からは楽の音が聞こえ、羽衣や瓔珞ウツロクが雨のように降り注いだ。これが『今昔物語』の最初の二話である。

以下、『天竺二部』では、八相成道と呼ばれる、釈迦の生涯の重要なエピソードが順を追って紹介されることになる。十七歳のみぎり、王宮の東西南北四方の門外に老人、病人、

死人、僧侶を見て、出家を決意したこと（四門遊観）。十九歳で王子としての地位も財産も三人の妻も捨て、城を出たこと（出家）。森中の仙人たちを訪れ、六年の修行を積んだこと（苦行）。他家自在天の天宮に誘おうとする魔王の悪計を退け、調伏したこと（降魔）。非常な光明を放つて禪定に入り、悟りを開いたこと（成道）。五人の比丘を手始めにして、衆生に法を説くに及んだこと（転法輪）。こうして、天人五衰に端を発した『今昔物語』は、釈迦の生涯をゆるやかな時間順序に沿って語りながら、震旦、本朝に及び、しだいに巨大な物語の集積としての輪郭を頭あたまわにするにいたる。

一二世紀の前半に成立を見た『今昔物語』については、現在なおごくわずかのことしか知られていない。日本文学史上最大の規模を誇る説話集でありながら、編纂者が誰であったかすら明確ではない。また、一千をゆうに越える説話の厳密な出典についても、いまだに国文学界で定説をみない。『天竺部』についていえば、梁の僧祐撰『釈迦譜』を中核にして『過去現在因果経』を参看したのではないかという推測が一応なされてはいるが、単に仏典のみならず、インドの古代叙事詩である『マハーバーラタ』から玄奘の『大唐西域記』まで、まさにアジア的というべき広範囲なテクスト間の交通が豊かに横たわっている。それは、喩えてみるならば、インドに無数の源をもつ水流が中国を経廻るうちにしだいに大河へと成長し、東端の日本に及んで巨大な物語の大海をなすにいたったという印象を与える。

では、こうした多様かつ大量の物語が十把ひとからげに並置されているのかといえ、けつしてそうではない。『天竺部』の五巻だけを考えてみても、説話の編纂の仕方にはみごとに一貫した整合性が存在している。巻一では釈迦の生誕と成道、教団の成立を軸として物語が集められ、巻二は釈迦本人による教化が中心となる。巻三は釈迦在世中の弟子たちの事蹟と仏の入滅、巻四は仏滅後の弟子たちの教化、そして巻五には補遺として釈迦出生前の古譚と仏の本生譚が主眼となるといったふうに、時間軸にそっておおまかではあるが秩序が立てられている。五巻全体の大部分を占める教化活動（転法輪）の説話は、教化の対象が釈尊の近親者、国王、長者、無名人といった具合に社会的地位に応じて順序付けられ、二つの相似した説話が一組ずつ並ぶという形式が採用されている。こうした配列秩序は『天竺部』に限ったことではない。続く『震旦部』『本朝部』においても、仏教の伝来がまず語り起こされると、仏、法、僧の順に説話が並べられ、最後に世俗に至る。二類話をもつて一組となすという律も同様である。一見いかにも雑然とした物語の寄せ集めであるように見えながらも、『今昔物語』はひとたび目を凝らしてみるならば、実に整然とした秩序によって精密に拵えられた三幅のマンガラ画に近いことが、こうして了解できる。

天竺、震旦、本朝。これは平安時代の日本人にとってほぼ世界の全域に相応していた。三世界に生起する泡粒のような無数の物語を、ひとしく釈迦の因縁譚として組織し、統轄すること。それは、物語という媒介を用いてイデオロギーとしての仏教が全世界を秩序付

けることを意味していた。ノースロップ・フライは「大いなる体系」のなかで、聖書を単に信仰の座右の書としてのみ読むことを退け、天地創造から終末にいたるすべての事件を含有し、百科全書にも似た莫大な知を収蔵した豊かな文学的テクストとして検討する可能性を示唆している（註²）。

このカナダの文芸批評家の響ひびみに倣うなら、あるいは『今昔物語』全三十一巻にも、物語を通して獲得された、世界の総体をめぐる知の集フルヒューブ蔵庫という名を与えても許されるべきかもしれない。直接の文字言語のうえででの体験であれ、口承言語を媒介としての体験であれ、『今昔物語』に収録された説話に接した者たちは、単に啓蒙の対象として仏教と呼ばれた同時代の支配的イデオロギーを受けただけではなかった。彼らはこの莫大な説話集成を通して、自分たちが現実^{レアル}に位置している世界の東の辺境と、そこからはるかに隔たっているはずの釈迦生誕の聖地との間に、ある必然をもった連続性を確認することができた。また、物語の力にそっくり身を預けることで、時間と空間の全体性を神話的に体験しえたのである。

だが、ここで興味深いことは、先にも述べたように日本最大の説話集である『今昔物語』が、そもそも天人五衰の記述から語り起こされているという、一見不思議な事実である。天人が天界から失墜する直前に軀に浮かびあがってくるという五つの不吉な徴候への言及が、なぜに一千余もの物語の冒頭に据え置かれなければならないのか。先に述べ